

オーストラリアにおけるスコットランド系移民

—オーストラリアの国民形成過程とスコティッシュ・アイデンティティの変容・同化—

山口 智 裕

「イギリス」とは、連合王国として単一のネーション枠組みを持った国民国家であると同時に、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドなどのブリテン諸島の諸地域の様々な要素から構成されるマルチ・エスニックな政治的共同体でもある。今なお文化的な相違を持つ各地域は、近代における連合王国としての統合運動の過程を通じて、ブリティッシュ・アイデンティティと地域的なアイデンティティとが並存する形で国民形成がなされた。アイデンティティ形成史という観点から国民国家の枠組みを相対化していくことは、地域の視点からイギリス近代を再構築することとも連なり、国民国家中心ではない、新たな関係性を提示することとなるのではないだろうか。

本論文では、ブリティッシュ・アイデンティティを持つ人々によって構成されていた大英帝国の、一地域としてのオーストラリア植民地への移民活動から、特にスコットランド系移民のアイデンティティの変容と、スコティッシュ・アイデンティティを保持していく上で重要な役割を担った長老派教会のオーストラリアにおける社会活動を中心に、移民の諸集団におけるアイデンティティ変容とオーストラリア社会の形成についてを検討していく。スコットランドは近代以前の段階では、固有の国民国家的な要素を強く持った地域であった。しかし、1707年の合同法による同君連合成立以降、スコットランド人は連合王国におけるプライオリティを高めることによって、スコティッシュ・アイデンティティと帝国臣民としての「帝国意識」とを共存させていくこととなった。そのことによって大英帝国の構造は、「イングランド」帝国から、マルチ・ネーション的な構造へと変質していったのである。また、移民国家であるオーストラリア植民地の国民形成という社会状況は、本国におけるスコティッシュ・アイデンティティとは異なる性質をスコットランド系移民に付与することともなった。

1788年から1900年までの間に、約150万人の移民がブリテン諸島からオーストラリアへと移住した。そのうちスコットランド系移民は23万人であり、イングランド系移民やアイルランド系移民よりも少数であった。しかし、スコットランド系移民はオーストラリア社会において政治的、経済的に支配層としての役割を担うとともに、労働運動や自由主義運動を通じて社会改革を推進する勢力としても存在した。イングランド系移民とアイルランド系移民が、それぞれ対極的な位置でオーストラリアの国民形成に関わっていたことと比較すると、スコットランド系移民は上流層にも労働者にも偏ることなく存在していたために、マージナルな存在としてオーストラリア社会へ参画することとなった。

スコットランドにおいて社会と深く関わりを持っていた長老派教会は、オーストラリア植民地でもスコットランド系移民のコミュニティと密接なつながりを持っていた。ジョン・ダンモア＝ラングに代表される長老派教会の社会的な活動は、オーストラリア植民地におけるスコティッシュ・アイデンティティを継承していくための拠り所となったと同時に、オーストラリア社会への同化と融合をはかり、スコットランド系移民を早期にオーストラリア国民として定着させることとなった。スコットランド系移民が共同体の喪失というイメージをいだかなかつたのは、長老派教会を通じてスコットランド・アイデンティティを保ち続けたことが大きく作用していた。19世紀の段階で、スコットランド系移民があくまで自らのエスニック・アイデンティティを保持したまま、そのパブリック・アイデンティティをオーストラリアン・アイデンティティへと移行させていった背景には、長老派教会が本国との歴史的な連続性を主張しつつも、オーストラリアにおける社会問題に積極的に対処しようとしたことが影響している。オーストラリア植民地においても、イングランド系移民にとってブリティッシュ・アイデンティティが、イングリッシュ・アイデンティティとほぼ同一のものであり、そうした認識を前提としてイングランド系

移民にとってのオーストラリアン・アイデンティティが形成されていったのに対して、スコットランド系移民は帝国臣民としての意識を保持していた一方で、長老派教会の宗教的なアイデンティティの影響である、自主独立的な意識も強く持っていた。そのためオーストラリア植民地においては、スコットランド系移民は自らの文化的特長を保持しつつも、相互排他的ではなく相乗効果をもたらすインセンティブな役割を果たした。そのことが移民の諸集団に対して、「オーストラリア国民」としての共属意識の形成を促進することとなった。連邦制を求める主張が非常に強かったアイルランド系移民と比較すると、スコットランド系移民は目立って社会と衝突するようなことはなかった。しかし、スコットランド系移民のパブリック・アイデンティティは、決して対外的な干渉を受けずに形成されたわけではない。オーストラリア植民地においてもスコットランド系移民は、イングランド系移民とアイルランド系移民との相互関係を通じてパブリック・アイデンティティを形成していった。

オーストラリア植民地においても、アイルランド系移民に対する意識的な隔たりは存在したが、それはあくまでブリテン諸島からの移民という広義の共属集団の内側に在る「他者」としての認識であり、その存在を否定する形でオーストラリア植民地におけるイングランド系移民とスコットランド系移民のパブリック・アイデンティティが形成されたわけではない。国民形成を進めていくうえで、彼らにとって明確に「他者」として認識されたのは、非白人であるアボリジナルと、中国系移民を中心とするアジア系移民であった。アイルランド系移民において特徴的であったのは、他のブリテン諸島内部からの移民者から、「カトリック=他者」としての認識を受けつつも、彼らがオーストラリア植民地において、オーストラリア国民としての国民統合を強力に推し進める存在として、帝国に対して距離を置いたパブリック・アイデンティティを持ったことにある。それに対してスコットランド系移民は、イングリッシュ・アイデンティティへの対抗意識が存在する一方で、帝国への帰属意識も高かったために、オーストラリア連邦への国民統合を積極的に推し進めるアクターとはなりえなかった。オーストラリア植民地へと移民した諸集団が、オーストラリア国民へと自らのパブリック・アイデンティティを変容させていった過程こそが、オーストラリア連邦の国民形成史でもある。19世紀の段階では、移民の諸集団は変化を受け入れつつも固有のパブリック・アイデンティティを維持し続けていた。そうした多様性に対する認識が、今日におけるオーストラリアの多文化主義へと受け継がれている。

ブリテン諸島から移民した諸集団は、19世紀においてはあくまでブリティッシュ・アイデンティティの枠組み内において自身のパブリック・アイデンティティを主張していた。ブリテン諸島においては「他者」であったアイルランド系移民は、オーストラリア植民地においては連邦制への支持を強く表明し続けてはいたが、それでも大英帝国としての枠組みを完全に否定してしまうようなことはなかった。オーストラリアン・アイデンティティと、ブリティッシュ・アイデンティティの重層性は連邦成立後も続き、現在に至るまでその社会的な影響をとどめている。ブリティッシュ・アイデンティティが文化的多様性を持っていたことが、オーストラリアにおける多文化主義へと結びついている。

スコットランド系移民のパブリック・アイデンティティから、連邦成立後のオーストラリア国民のナショナル・アイデンティティとして結実した最大の要素は、長老主義的な個人主義を、「自発的意思」としてオーストラリアン・アイデンティティとして定着させた点にある。長老派教会の宗教的なアイデンティティは、スコットランド系移民のエスニック・アイデンティティと、パブリック・アイデンティティの両面に共通する影響を与えていたために、生活空間などを通じて、世代を越えて受け継がれていく価値観として存在していた。またその社会的な活動については、スコティッシュ・アイデンティティを維持していくために行われていたことでもあって、19世紀を通じてオーストラリア植民地においても、スコティッシュ・アイデンティティは変容しつつ保持され続けた。

オーストラリアで非常に早い時期から、民主主義という言葉が肯定的なニュアンスを持って一般に用いられるようになった背景には、スコットランド系移民がもたらした影響が多分にある。長老派教会を通じて形成されたスコットランド系移民のパブリック・アイデンティティは、国民形成を通じてオース

トラリアのナショナル・アイデンティティとして受け継がれた。スコットランド系移民は移民の諸集団の中でも特に高い順応性を持っていたために、オーストラリアにおける国民形成過程において、民主主義的なオーストラリアン・アイデンティティを創出するという役割を果たしたのではないだろうか。